

『光の使者』

地球に奇妙な異星人が現れた。

姿形は地球人とさほど変わらないが体は半透明で、ときどきピカピカと輝きを放つ。どうやら言葉の代わりに光でコミュニケーションを取ろうとしているようだった。

地球の学者たちはその光のパターンを解読しようと懸命に取り組んだ。複雑な数学的解析、言語学的な推測、すべてを駆使して異星人が何を伝えようとしているのかを理解しようとした。

しかし、何週間経っても学者たちはメッセージを読み解くことができない。彼らは疲れ果て、いよいよ諦めかけていた。

その間も異星人は一歩たりともその場を動かず、ただ同じパターンで光り続けているだけだった。

ある研究員は言った。

「そもそも、本当にあの光にはなんらかのメッセージが込められているのだろうか。もしかしたら、はじめから特別な意味なんてないのかもしれない。」

結局、誰一人として光の謎を解き明かす者は現れないまま、ある日異星人は何事もなかったかのように宇宙へ去っていった。

故郷に戻ると異星人はリーダーに報告した。

「どうやら地球人はこちらのメッセージを何も理解できなかったようです。」

リーダーは満足げにピカピカと輝いた。

「それでいい。あの光は"我々とは関わるな"という意味だったのだから。それを解読できない程度の生命体ならば、しばらくは私たちの脅威となることはないだろう。」